

透析患者の性差間での身体機能評価、フレイル評価の検討

野原奈緒 濱田千江子

順天堂大学腎臓内科

背景として、透析患者では、高齢化や透析療法の長期継続に伴い、骨格筋減少や筋力・運動能力の低下がQOLの低下を招く。生理的予備能が低下したフレイルは、CKDのステージの進行とともに頻度が増えるといわれており、また運動機能が著しく低下したサルコペニア状態は生命予後が悪いと報告がある。

透析患者の身体機能の変化に対する性差の検討を行うため、今回、順天堂医院腎・高血圧内科の外来維持透析患者50名（男性30名、女性20名）を対象に、身体機能ならびに生活の活動性に関して以下の項目を測定した。身体機能として、透析前にTime-Up & Go（3 m先までの歩行往復時間：TUG）、左右の片脚立ちの持続時間、左右握力を測定した。生活の活動性の評価は、リストバンド型身体活動計を1週間装着して、透析患者の日常生活での歩数や消費カロリー・運動量（METsで評価）、睡眠等の測定を行い、これら身体機能や活動性での性差について検討を行った。

結果は、握力は男性で有意に強い結果であったが、片脚立ちやTUGには性差間での有意差はなかった。生活の活動性では、立位の軽作業時間は透析日・非透析日ともに女性で有意に長く、坐位時間は男性で有意に長い結果となった。また、透析期間との関連では、片脚立ち・平均METs・平均歩数において正の相関を示した。フレイル評価では透析患者のうち8割以上がプレフレイル・フレイルに該当し、プレフレイル群での身体活動は多様であった。

握力は男女の元々の握力の差が大きく反映していると考えられ、男女共年齢とともに運動機能の衰えが認められた。また、女性は透析日・非透析日に関係なく、家事などの軽作業で男性に比べて運動量が多くなっていると考えられた。また、運動機能や日常活動の高い症例では、長く透析を継続できる可能性が示唆された。今後は、経時的に身体機能評価、フレイル評価を行い、透析患者の生命予後等を含め評価する予定である。